

満洲語における硬口蓋化と逆硬口蓋化

その他のタイトル	Palatalization and Anti-palatalization in Manchu
著者	王 海波
雑誌名	東京大学言語学論集 = Tokyo University linguistic papers (TULIP)
巻	41
号	TULIP
ページ	341-352
発行年	2019-09-30
URL	http://doi.org/10.15083/00078595

満洲語における硬口蓋化と逆硬口蓋化¹

王 海波

キーワード：満洲語 硬口蓋化 逆硬口蓋化

要旨

満洲語には、硬口蓋化と逆硬口蓋化が共にある。満洲語の硬口蓋化には、(i) 歯茎音の硬口蓋化と (ii) 軟口蓋音の硬口蓋化がある。(i) はアルチュカ方言を除く全ての変種に規則的に起こっているが、(ii) は現代方言のごく一部の語に散発的に起こっているのみである。また、満洲語の逆硬口蓋化も複数の変種に見られるが、どの変種においても規則的に起こったわけではなく、散発的に起こっているのみである。

1. はじめに

1.1. 満洲語の概要

満洲語は満洲・ツングース系の言語であり、元々清国（1616-1912）を建てた満洲族の言語である。満洲語の古典語²（以下「満洲古典語」または「古典語」）は17世紀から18世紀末にかけて清国で使用された満洲語を指す。現在では口語としての満洲語は中国黒龍江省の数地点の数千人位の満洲族と、中国新疆ウイグル自治区のチャプチャル（察布查爾）シベ（錫伯）自治県の約1万7千人のシベ族によって話されている（津曲 1992: 203, 趙阿平・朝克 2001: 2）。本稿で扱う満洲語三家子方言と黒河方言は、現在中国黒龍江省チチハル市富裕県三家子屯と同省黒河市で話される満洲語の方言である。また、本稿で扱う満洲語シベ方言は、現在中国新疆ウイグル自治区のチャプチャルシベ自治県で話される満洲語の方言である。

¹ 本稿は中国民族語言学会語言類型学專業委員会第2回学術年会（2018年10月28日）における口頭発表「満語現代方言中の硬腭化と反硬腭化」に基づいて作成したものである。言及される箇所をのぞくと、全てのデータは筆者の調査による。本稿を執筆するにあたり、東京大学大学院人文社会系研究科の梅谷博之先生に貴重なコメントを頂いた。この場を借りてお礼を申し上げたい。

² 「文語」と呼ばれることが多いが、文体として口語と対立する意味合いの文語と誤解される可能性があるため、本論では、早田輝洋（2010）と早田清冷（2015）の「満洲古典語」の言い方に従い、「古典語」と呼ぶことにする。本稿の古典語の形式は1795年に刊行された『五体清文鑑』に従う。具体的な資料は、田村ほか（1966-1968）である。本稿の古典語の表記は Möllendorff (1892) が提案したモレンドルフ表記に従うが、次の3点において異なる表記をする。(i) 早田輝洋（2003）に従い、古典語の u と ū を同じ音素と見なし、同じ記号 (u) を用いる。(ii) 早田輝洋（2003）に従い、古典語の軟口蓋音 (k, g, x) と口蓋垂音 (q, c, ɣ) を異なる音素と見なし、異なる記号を用いる。(iii) モレンドルフ表記の ng を η で表記する。なお、本稿における満洲語現代方言の表記は王海波（2018）に従う。

1.2. 本稿の目的

満洲語の硬口蓋化について扱う先行研究は見られるが、その逆の変化と思われる逆硬口蓋化について扱う先行研究は見られない。また、満洲語における硬口蓋化は、変化する前の調音点によって、歯茎音の硬口蓋化と軟口蓋音の硬口蓋化に分けることができると考えられる。満洲語の個別の変種における個別の硬口蓋化について扱う先行研究は見られるが、満洲語の各変種における硬口蓋化およびそれぞれの規則性（規則的な変化か、それとも散発的な変化か）について体系的に考察する先行研究は見られない。そこで、本稿では満洲語（特に満洲語の現代方言）のなるべく多くの変種のデータに基づいて、複数の種類の硬口蓋化および逆硬口蓋化について扱うことにする。

2. 硬口蓋化

2.1. 硬口蓋化の定義

硬口蓋化は次の2つの意味に使われることがある。

- (i) 共時的な音声学上の硬口蓋化。ある音の調音に際して、主な調音が行われるのと同時に、前舌が硬口蓋に近づく現象。二次的調音の一種である。たとえば、日本語のカ行音のうちで、「キ」の子音は、直接に母音 /i/ がくる影響で、「カ」「コ」などの子音と比べると舌の位置が前寄りであり、硬口蓋化されている（亀井ほか 1996: 520）。
- (ii) 歴史的な音変化としての硬口蓋化。たとえば、印欧語族インド語派における $c [tʃ]$ は本来 ke, ki の硬口蓋化によって生じた音である（亀井ほか 1996: 520）。

本論における硬口蓋化は、上記の (ii) 歴史的な音変化としての硬口蓋化の意味で用いられる。

2.2. 満洲語における各種類の硬口蓋化

満洲語には次のような種類の硬口蓋化が見られる。

- (i) 歯茎音の硬口蓋化
- (ii) 軟口蓋音の硬口蓋化

ただし、この2種類の硬口蓋化のどちらも満洲語の全ての変種に見られるわけではない。下では実例を見る。

2.2.1. 歯茎音の硬口蓋化

[1] 規則的な変化

満洲古典語の固有語には *ti, di* を含む語がない。一方、ツングース諸語と満洲古典語の同源語には、*ti ~ ci, di ~ ji* の対応が見られる場合がある。たとえば、朝克（1997）には次のような例がある。

(1)	満洲古典語	ヘジエン語	オロチョン語	エヴェンキ語	意味
a	<i>ciχala-</i>	<i>tixala-</i>	<i>tikala-</i>	<i>tiχala-</i>	好きだ
b	<i>taci-</i>	<i>tati-</i>	<i>tati-</i>	<i>tati-</i>	勉強する

朝克（1997: 63-64, 138-139）

(2)	満洲古典語	ヘジエン語	オロチョン語	エヴェンキ語	意味
a	<i>donji-</i>	<i>doldi-</i>	<i>dooldi-</i>	<i>dooldi-</i>	声
b	<i>banji-</i>	<i>baldi-</i>	<i>baldi-</i>	<i>baldi-</i>	産む

朝克（1997: 108, 134）

河内（1996: 37, 41）は満洲古典語の固有語に *ti, di* がいないことを踏まえ、満洲古典語より早い段階に *ti, di* はそれぞれ *ci, ji* に変化したと主張している。この変化は、まさに歯茎音 *t, d* の硬口蓋化と思われる。

さらに、Fuente (2013) は、満洲・ツングース祖語の **tyV, *dyV*³ は女真語までに **cV, *jV* に変化したが、満洲・ツングース祖語の **ti, *di* の硬口蓋化は女真語の段階まで起こっておらず、女真語と満洲古典語の間に起こった、という2段階の変化があったと主張している。

上述した先行研究から、満洲古典語までに、歯茎音の *ti > ci, di > ji* という規則的な硬口蓋化があったということがわかる。

ほとんどの現代方言は古典語と同じように、歯茎音の *ti > ci, di > ji* という規則的な硬口蓋化があった。たとえば、上記に挙げた古典語の語の三家子方言・黒河方言・シベ方言における同源語は次のようである。

³ この *y* は子音の共時的（二次的調音の）硬口蓋化 [ɥ] を示すと思われる。すなわち、**tyV, *dyV* はそれぞれ、**[tɥV]* と **[dɥV]* を表すと思われる。

(3)	満洲古典語	三家子方言	黒河方言	シベ方言	
a	<i>ciχala-</i>	- ⁴	- ⁵	<i>ciχale-</i> / <i>cyaxale</i> - ⁶	好きだ
b	<i>taci-</i>	<i>taci-</i>	<i>taci-</i>	<i>taci-</i>	勉強する
c	<i>donji-</i>	<i>duNji-</i>	<i>duNji-</i> / <i>duNjya-</i>	<i>dyoNji-</i> / <i>dyaNji-</i>	声
d	<i>banji-</i>	<i>baNji-</i>	<i>baNji-</i> / <i>baNjya-</i>	<i>baNji-</i>	産む

一方、上記の変化は満洲語のすべての現代方言に起こったわけではないようである。アルチュカ方言⁷では、穆曄駿（1985; 1987）が記録した例を見る限り、*ti*, *di* の硬口蓋化が起こらなかったようである。例えば、満洲古典語の *cixe* 「虱」と *ciŕku* 「枕」と *jiŋbi* 「来る」と *weji* 「叢林」の、穆曄駿の記録したアルチュカ方言の同源語は、それぞれ *t'ixə*⁸, *t'irku*, *dimi*, *udi* のような形式である（穆曄駿 1985: 10; 1987: 12）。すなわち、この点においては、アルチュカ方言は古典語よりも古い形式を保っていると考えられる。

(4)	満洲古典語	アルチュカ方言	意味
a	<i>cixe</i>	<i>t'ixə</i>	虱
b	<i>ciŕku</i>	<i>t'irku</i>	枕
c	<i>jiŋbi</i>	<i>dimi</i>	来る
d	<i>weji</i>	<i>udi</i>	叢林

穆曄駿（1985: 10; 1987: 12）

[2] 散発的な変化

上述した満洲古典語における *t*, *d* の硬口蓋化およびアルチュカ方言以外の現代方言における *t*, *d* の硬口蓋化は、共に *i* が後続することを条件としており、また、共に規則的に起こっているため、同じ変化（同じ段階に起こった変化）の可能性が高い。一方、古典語の「*t*, *d*+*i* 以外の母音」の中にも現代方言で *ci*, *ji* に対応するものがある。これは、古典語のいくつかの「*t*, *d*+*i* 以外の母音」の母音が変化して *ti*, *di* になり、さらにその *ti*, *di* のうち一部の

⁴ *ciχala-* の三家子方言における同源語は筆者の調査では見つからなかった（筆者が調査した話者はこの語を知らなかった）が、先行研究には、*čialəm* [*tɕi' aləm*] (Kim et al. 2008: 60) と *tei' va:lume* (恩和巴図 1995: 354, 清格爾泰 1982=1998: 337) のような記録がある。これらの形式からわかるように、三家子方言の同源語にも硬口蓋化があったようである。

⁵ *ciχala-* の黒河方言における同源語は筆者の調査では見つからなかった（筆者が調査した話者はこの語を知らなかった）が、先行研究には、*teixalme* (王慶豊 2005: 79) と *teixalame*, *teixaləme* (王慶豊 2005: 167) のような記録がある。これらの形式からわかるように、黒河方言の同源語にも硬口蓋化があったようである。

⁶ *cyaxale-* は *ciχale-* の 1 音節目の母音 *i* が 2 音節目の母音 *a* に同化された形式と考えられる。ここの *y* は子音の硬口蓋化を示す。

⁷ アルチュカ方言は中国黒龍江省で使用された満洲語の方言である（穆曄駿 1985）。

⁸ 穆曄駿（1985）は *t'ixə* と *t'irku* のような表記をしているが、「*'*」という記号の意味について言及していない。中国では有気音を「*'*」で表すことが多い（例えば唐作藩 2016: 15）ため、ここの *t'ixə* と *t'irku* における「*'*」も有気音を表している可能性が高い。

ものの子音が硬口蓋化して *ci, ji* になったと考えられる。この変化は古典語にはなく、現代方言だけに見られる。この「*t/d+i* 以外の母音」由来の *ti, di* の硬口蓋化は、古典語における *ti, di* の硬口蓋化より遅い段階に起こった変化であり、義務的に起こっていない。すなわち、起こる場合と起こらない場合が共にある（起こる場合の方が稀なようである）。例えば、次のような例がある。

(i) 「*t/d+i* 以外の母音」由来の *ti, di* が *ci, ji* に変化した場合。古典語の *tuci*- 「出る」は、シベ方言では *tici*- に変化したが、さらに硬口蓋化が進んで *cici*- のような発音もある。シベ方言では、この2つの形式のどちらもあり、個人差もあるが、中年以下の話者では後者の方が主流のようである。

(ii) 「*t/d+i* 以外の母音」由来の *ti, di* が *ci, ji* に変化していない場合。古典語の *tebeliye*- 「抱く」のシベ方言における同源語は *tiwele*- であり、*ciwele*- への変化が起こっていない。シベ方言に *ciwele*- 「唾を吐く」という別の語があるため、それと同音衝突を避けるために「抱く」を意味する *tiwele*- が *ciwele*- に変化していないようであるが、同音衝突が生じない場合でも、「*t/d+i* 以外の母音」由来の *ti, di* が *ci, ji* に変化していない例も数多くある。たとえば、古典語の *atangi* 「いつ」は、三家子方言では *aytiŋe*、黒河方言では *aytiŋi*、シベ方言では *aytiŋe* である。3方言とも *ti* が *ci* に変化していない。古典語の *deji*- 「燃やす」は、三家子方言と黒河方言とシベ方言のどれにおいても *diji*- であり、3方言とも語頭の *di* が *ji* に変化していない。また、古典語の *adali* 「同様」の三家子方言における同源語は *aydili* であり、*di* が *ji* に変化していない。

上記の例から分かるように、現代方言における新しい段階の歯茎音の硬口蓋化は、起こる場合と起こらない場合が共にある。起こる場合の方が稀であり、散発的な変化のようである。

2.2.2. 軟口蓋音の硬口蓋化

[1] 規則的な変化

軟口蓋音の規則的な硬口蓋化は満洲語のどの変種にも見られないようである。先行研究では、服部四郎（1941）によれば、吉林省の方言には、軟口蓋音の硬口蓋化がない。筆者が調査した現代方言の三家子方言と黒河方言とシベ方言のどれにおいても、軟口蓋音の規則的な硬口蓋化が見られない。

[2] 散発的な変化

上述したように、満洲語のどの変種にも、軟口蓋音の規則的な硬口蓋化が見られない。一方、筆者の調査では、現代方言には散発的に起こる例がある。例えば、次のような例がある。

三家子方言の話者 Sa-1⁹は「とても」を表すのに gyaku [ˈkʲaxo]~gyake [ˈkʲaxɤ] という語を使用することが多い。この語を jyaku [ˈtɕʲaxo]~jyake [ˈtɕʲaxɤ] のようには発音しない。一方、話者 Sa-2 はそれを jyake [ˈtɕʲaxɤ] のように発音し、gyaku [ˈkʲaxo]~gyake [ˈkʲaxɤ] のようには発音しない。この語の語源については、恩和巴図 (1995:252) や王敵非 (2014:115) などは古典語の giyan「理」+aqu「ない」に由来すると主張している。すなわち、jyake より、gyaku~gyakeの方が古い形式を保っていると考えられる。また、調査時に話者 Sa-1 は 80 代で、話者 Sa-2 は 60 代であった。したがって、gyake>jyake のような通時の変化があった可能性が高い。

2.3. 硬口蓋化のまとめ

本節で述べた各変種の満洲語における各種類の硬口蓋化をまとめると、次の表のようになる。

表 1：満洲語における硬口蓋化のまとめ

歯茎音の硬口蓋化	1 回目は満洲語全変種に規則的 (アルチュカ方言以外) 2 回目は満洲語現代方言に散発的
軟口蓋音の硬口蓋化	満洲語現代方言に散発的

3. 逆硬口蓋化

3.1. 逆硬口蓋化の意味

古典語の ci,ji は、筆者の調査では、三家子方言と黒河方言の同源語では ki,gi として現れることがある。後述するように、ツングース諸語などの同源語との比較から、この違いは ki > ci と gi > ji のような硬口蓋化より、ci > ki と ji > gi のような逆の方向の変化による可能性が高いことがわかる。ci > ki と ji > gi のような変化は、硬口蓋化と逆の方向の変化であるため、本稿ではそれを逆硬口蓋化と称することにする。

3.2. 逆硬口蓋化の例

下では、このような例をみる。

[1] 三家子方言と黒河方言の例 1：cira の例

古典語には同音異義語 cira「顔」と cira「きつい；厳しい」がある。三家子方言と黒河方言とシベ方言における同源語は、次のようである。

⁹ 話者の番号 (たとえば Sa1 の 1) は、筆者が調査した順に振ったものである。

(5)

満洲古典語	<i>cira</i> 「顔」
三家子方言	<i>cila</i> [tʰi'la:] 「顔」
黒河方言	<i>cila</i> [tʰi'la:] 「顔」
シベ方言	<i>cira</i> [tʰi'ra:] 「顔」

(6)

満洲古典語	<i>cira</i> 「きつい；厳しい」
三家子方言	<i>kila</i> [kʰi'la:] 「きつい；強い、酷い」
黒河方言	<i>kila</i> [kʰi'la:] ~ <i>kyala</i> [kʰe'la:] 「きつい；強い、酷い」
シベ方言	<i>cira</i> [tʰi'ra:] 「きつい；厳しい」

「顔」を表す *cira* の場合、古典語と 3 つの現代方言のどれにおいても、語頭が *c* である。一方、「きつい；厳しい」を表す *cira* の場合、古典語とシベ方言では、語頭の子音が *c* であるが、三家子方言と黒河方言では、語頭の子音が *k* である。すなわち、後者（「きつい；厳しい」を表す *cira*）の場合、語頭に *c* と *k* の違いが見られる。この *c* と *k* の違いは、*ki* > *ci* のような硬口蓋化によるのか、それとも *ci* > *ki* のような逆硬口蓋化によるのか、という問題がある¹⁰。

この例では、語頭の子音（軟口蓋音）の直後に母音 *i* が存在する。前節で述べたように、*ti* > *ci*, *di* > *ji* という規則的な歯茎音の硬口蓋化も直後に母音 *i* の存在を条件としている。したがって、この *k* と *c* の違いも硬口蓋化（すなわち *k* > *c*）による可能性があると考えられる。

この語において *k* と *c* のどちらの方が先の形式なのかをみるために、満洲語と同じく満洲・ツングース語族に属する他の言語（ツングース諸語）における同源語をみる必要があると考えられる。次は朝克（1997）が記述した *cira* 「きつい；厳しい」のツングース諸語の同源語である。

(7)	満洲古典語	ヘジェン語	オロチョン語	エヴェンキ語	意味
	<i>cira</i>	<i>tira</i> / <i>tiran</i> ¹¹	<i>tira</i>	<i>tiran</i>	きつい
					朝克（1997: 64, 128, 144, 138）

¹⁰ 古典満洲語が分岐して現代の三家子方言・黒河方言などができたのであれば、論理的には *ci* > *ki* という方向しかありえないと考えられる。しかし、三家子方言と黒河方言の先祖は 1689 年まで寧古塔（満洲東部）に住んでいた（金啓孫 1981: 23-24）が、古典語の話者は 1644 年まで満洲南部に住んでおり、その後北京などに移住したため、「古典語」と「現代の三家子方言と黒河方言の先祖の方言」は方言関係にあった可能性が高い。

¹¹ 朝克（1997）が記述したホジェン語の「きつい」の形式は、ページによって異なる。64 ページと 128 ページと 144 ページでは *tira* になっているが、138 ページでは *tiran* になっている。

朝克 (1997) の記述から分かるように、この語のツングース諸語における同源語は、語頭が **k** でも **c** でもなく、**t** である。この現象に関しては、次のような可能性がある。

前節で述べたように、満洲古典語に歯茎音の硬口蓋化 (**ti > ci, di > ji**) が規則的に起こっており、ツングース諸語の語頭の **ti** と満洲古典語の語頭の **ci** の違いは、満洲古典語における **ti > ci** のような硬口蓋化による可能性が高い。したがって、満洲古典語のこの語における **ci** は、**ti** の硬口蓋化の結果であり、**ki** の硬口蓋化の結果ではないと考えられる。

すなわち、三家子方言と黒河方言の同源語における語頭の **ki** は、満洲古典語の **ci** より早い段階の形式ではなく、逆に、三家子方言と黒河方言の同源語における語頭の **ki** は、**ci > ki** のような逆硬口蓋化による可能性が高い。

[2] 三家子方言と黒河方言の例 2 : *jiramin* の例

古典語の *jiramin* 「厚い」と現代方言の三家子方言・黒河方言・シベ方言の同源語は次のようである。

(8)

古典語	<i>jiramin</i> 「厚い」
三家子方言	<i>gilame</i> [<i>ki'la:mx</i>]
黒河方言	<i>gilaymi</i> [<i>ki'le:mi</i>]
シベ方言	<i>jirame</i> [<i>dzi'ram</i>]

古典語とシベ方言では、語頭の子音が **j** であるが、三家子方言と黒河方言では、語頭の子音が **g** である。すなわち、語頭に **j** と **g** の違いが見られる。この **j** と **g** の違いは、**gi > ji** のような硬口蓋化によるのか、それとも **ji > gi** のような逆硬口蓋化によるのか、という問題がある。

この例でも、語頭の子音（軟口蓋音）の直後に母音 **i** が存在する。前節で述べたように、**ti > ci, di > ji** という規則的な歯茎音の硬口蓋化も直後に母音 **i** の存在を条件としている。したがって、この **g** と **j** の違いも硬口蓋化（すなわち **g > j**）による可能性があると考えられる。ただ、前述した *cira* 「きつい；厳しい」の例からもわかるように、その逆の可能性（逆硬口蓋化の可能性）もある。

この語において **g** と **j** のどちらの方が先の形式なのかをみるために、満洲語と同じく満洲・ツングース語族に属する他の言語（ツングース諸語）における同源語をみる必要があると考えられる。次は朝克 (1997) が記述した *jiramin* 「厚い」のツングース諸語の同源語である。

(9)	満洲古典語	ヘジエン語	オロチョン語	エヴェンキ語	意味
	<i>jiramin</i>	<i>diramu</i>	<i>dirama / diram</i> ¹²	<i>diram</i>	厚い
					朝克 (1997: 64, 144, 180)

また、この語の女真語における同源語は *diramei* 「厚い」(Kiyose 1977: 135) または *diramai* 「厚い」(穆鴻利 1995: 60) のような形式である。ツングース諸語の同源語と同じように語頭が *d* である。

なお、Starostin et al. (2003) は、この語の満洲・ツングース祖語における形式を **dir-* のように設定している。

上述したツングース諸語と女真語と満洲・ツングース祖語の形式から分かるように、この語の元々の形式では、語頭が *g* でも *j* でもなく、*d* である。この現象に関しては、前述した *cira* 「きつい；厳しい」の例と同じように、次のような可能性がある。

前節で述べたように、満洲古典語に歯茎音の硬口蓋化 (*ti > ci*, *di > ji*) が規則的に起こっており、ツングース諸語などの語頭の *di* と満洲古典語の語頭の *ji* の違いは、満洲古典語における *di > ji* のような硬口蓋化による可能性が高い。したがって、満洲古典語のこの語における *ji* は、*di* の硬口蓋化の結果であり、*gi* の硬口蓋化の結果ではないと考えられる。

すなわち、三家子方言と黒河方言の同源語における語頭の *gi* は、満洲古典語の *ji* より早い段階の形式ではなく、逆に、三家子方言と黒河方言の同源語における語頭の *gi* は、*ji > gi* のような逆硬口蓋化による可能性が高い。

[3] シベ方言の例

筆者が調査したシベ方言の話者のデータには、逆硬口蓋化の例がない。しかし、次のような二次的なデータがある。満洲古典語の *cai*-「とる」のシベ方言における同源語は、筆者が調査した話者全員が *gya-* のような形式を使用している。しかし、筆者の調査では、シベ方言使用地域に在住しているシベ方言の習得者（非母語話者）の 1 人（劉飛熊）は、*gya-* の形式を使用する母語話者がほとんどであるが、*jya-* のような形式を使用するごく一部の母語話者と、*dya-* のような形式を使用するごく一部の母語話者もいる、と言及している。

この *jya-* と *dya-* の形式に関しては、*gya- > jya- > dya-* のような変化があった可能性があると考えられる。もしこのような変化が実際に起こったようであれば、*jya- > dya-* のステップの変化は、逆硬口蓋化と考えられる。ただし、前述した三家子方言と黒河方言の例と異なり、この例では逆硬口蓋化の結果、軟口蓋音ではなく、歯茎音になる。

¹² 朝克 (1997) が記述したオロチョン語の「厚い」の形式は、ページによって異なる。64 ページでは *dirama* になっているが、144 ページと 180 ページでは *diram* になっている。

[4] 『ニシャン・サマン伝』¹³における例

河内（1987）によれば、『ニシャン・サマン伝』の第3手稿本には *kira* 「強い」のような綴りと *giramin* 「厚い」のような綴りがあり、それぞれ古典語の *cira* 「きつい；厳しい」と *jiramin* 「厚い」の同源語である。

なぜ『ニシャン・サマン伝』の第3手稿本の形式と古典語の同源語の間に *ki, gi* と *ci, ji* のような違いがあるかについて河内（1987）は言及していない。本節の [1] と [2] から分かるように、三家子方言の *kila, gilame* と黒河方言の *kila, gilaymi* の語頭の *ki* と *gi* は、それぞれ古典語の *cira* と *jiramin* の語頭の *ci* と *ji* の逆硬口蓋化の結果である。『ニシャン・サマン伝』の第3手稿本における *kira* と *giramin* もそれぞれ古典語の *cira* と *jiramin* の同源語と考えられるため、この2つの語の語頭にある *ki* と *gi* も、同じように逆硬口蓋化の結果と考えられる。

[1] と [2] で述べたように、古典語の *cira* 「きつい；厳しい」と *jiramin* 「厚い」における語頭の *c, j* が三家子方言と黒河方言でそれぞれ *k, g* に変化したのは、逆硬口蓋化による可能性がある。しかし、このような逆硬口蓋化の例は筆者の調査の一次的データには三家子方言と黒河方言のそれぞれ2例のみである。したがって、散発的な変化と考えられる。また、シベ方言のごく一部の話者の発音にも類似する変化があるようであり、『ニシャン・サマン伝』と『旧満洲檔』の綴りも類似する変化を示唆しているが、それもみな散発的な変化のようである。

要するに、逆硬口蓋化は、満洲語の複数の変種に散発的に起こった例があるが、どの変種においても規則的に起こった変化ではないようである。

3.3. 逆硬口蓋化の動機

通言語的には、硬口蓋化は稀な現象ではないが、逆硬口蓋化は硬口蓋化と比べてごく稀な現象のようである。ただし、逆硬口蓋化と思われる現象は満洲語だけではなく、他の言語にも見られる¹⁴。逆硬口蓋化の動機に関しては、不明なところが多いが、前述した満洲語三家子方言と黒河方言の逆硬口蓋化の例に限っていうと、次のような要因が関与する可能性があると考えられる。

¹³ 『ニシャン・サマン伝』は満洲族を含めたツングース系民族の間に語り伝えられた口誦文学で、ツングース民族の中から生まれた固有の作品である。満文『ニシャン・サマン』には複数の手稿本がある。ロシア民族研究所東方学檔案室に3種類の手稿本、中国に1本、ドイツに数種の本がある（河内1987: 141-145）。

¹⁴ 李虹（2003: 2）によれば、中国語の陝西省富平方言の美原話と城関話の間には *k'*, *k* と *tɕ'*, *tɕ* の対応が見られる。李虹によれば、美原話の臭・腸は *k'* で始まり、知・張・正・照は *k* で始まる。これらの漢字の中古音の音節頭子音の調音点はみな歯茎であり、軟口蓋ではない。したがって、この場合の城関話の発音は美原話より古いと考えられる。すなわち、美原話には *tɕ'*, *tɕ* > *k'*, *k* のような変化があったと考えられる。

(i) 過剰修正 (hypercorrection) による可能性がある。中国語の多くの方言では、軟口蓋音は齊齒呼韻と撮口呼韻の場合、規則的な硬口蓋化が起こっている (唐作藩 2016: 98-100)。一方、前述したように、満洲語のどの変種にも軟口蓋音の規則的な硬口蓋化が起こっていない。したがって、満洲語三家子方言と黒河方言の昔の話者は、満洲語の一部の語にある *ci* と *ji* を発音するときに、それを中国語からの影響による誤った発音と誤認してそれぞれ *ki* と *gi* に変えた、という可能性がある。

(ii) *cira* の場合、前に (3.2.[1]) 述べたように古典語の同源語に同音異義語があるため、同音衝突を避けることも動機である可能性がある。

前述したように、逆硬口蓋化は散発的な変化である。したがって、特別な動機があつての変化ではない可能性が高い。上述した3つの可能性はあくまでも推測である。

4. おわりに

本稿では次のことを明らかにした。満洲語には、硬口蓋化と逆硬口蓋化が共にある。満洲語の硬口蓋化には、(i) 歯茎音の硬口蓋化と (ii) 軟口蓋音の硬口蓋化がある。(i) はアルチュカ方言を除く全ての変種に規則的に起こっているが、(ii) は現代方言のごく一部の語に散発的に起こっているのみである。また、逆硬口蓋化も複数の変種に見られるが、どの変種においても規則的に起こったわけではなく、散発的に起こっているのみである。

参考文献

- 朝克 (1997) 『滿通古斯諸語比較研究』北京：民族出版社。
- 恩和巴図 (1995) 『滿語口語研究』呼和浩特：内蒙古人民出版社。
- Fuente, José Andrés Alonso de la. (2013) Written Manchu *akjan* ‘thunder’. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hung.* 66(1): 59-68.
- 服部四郎 (1941) 「吉林省に満洲語を探る」『言語研究』7/8: 47-67.
- 早田輝洋 (2003) 「満洲語の母音体系」『九州大学言語学論集』23: 1-10.
- 早田輝洋 (2010) 「満洲語と満洲文字」寺村政男・福盛貴弘 (編) 『語学教育フォーラム』24: 1-35.
- 早田清冷 (2015) 「古典満洲語属格標識 -i の研究」博士論文、東京大学人文社会系研究科。
- 金启孫 (1981) 『滿族的歴史与生活：三家子屯調査報告』哈爾濱：黒龍江人民出版社。
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典第6巻』東京：三省堂。
- 河内良弘 (1987) 「ニシヤン・サマン伝 訳注」『京都大学文学部研究紀要』26: 141-230.
- 河内良弘 (1996) 『満洲語文語文典』京都：京都大学学術出版会。
- Kim, Juwon & Dongho Ko & D O Chaok & Youfeng Han & Lianyu Piao & B. V. Boldyrev. (2008) *Materials of Spoken Manchu*. Seoul: Seoul National University Press.
- Kiyose, Gisaburo Norikura. (1977) *A Study of the Jurchen Language and Script: Reconstruction and*

- Decipherment*. Kyoto: Horitsubunkasha.
- 李虹 (2003) 『富平方言研究』陝西師範大学修士學位論文.
- Möllendorff, P. G. von. (1892) *A Manchu Grammar with Analysed Texts*. Shanghai: American Presbyterian Mission Press.
- 穆鴻利 (1995) 「女真語与滿語之比較研究」『滿語研究』20: 56-68.
- 穆曄駿 (1985) 「阿勒楚喀滿語語音簡論」『滿語研究』2: 5-15.
- 穆曄駿 (1987) 「巴拉語」『滿語研究』5: 2-31, 128.
- 清格爾泰 (1982=1998) 「滿洲語口語語音」『清格爾泰民族研究文集』232-355. 北京: 民族出版社.
- Starostin, Sergej & Anna Dybo & Oleg Mudrak (2003) *Etymological Dictionary of the Altaic Languages*. Brill: Leiden.
- 田村実造・今西春秋・佐藤長 (1966-1968) 『五体清文鑑訳解』京都: 京都大学文学部内陸アジア研究所.
- 唐作藩 (2016) 『音韻学教程』北京: 北京大学出版社.
- 津曲敏郎 (1992) 「滿州語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 『言語学大辞典第4巻』pp. 203-205. 東京: 三省堂.
- 王敵非 (2014) 「三家子滿語口語 *kiak^h* 来源探析」『滿語研究』114: 113-116.
- 王慶豊 (2005) 『滿語研究』北京: 民族出版社.
- 王海波 (2018) 「滿洲・シベ語現代方言音韻論」博士論文, 東京大学人文社会系研究科.
- 趙阿平・朝克 (2001) 『黒龍江現代滿語研究』哈爾濱: 黒龍江教育出版社.

Palatalization and Anti-palatalization in Manchu

WANG, Haibo

haibohaipo@163.com

Keywords: Manchu, palatalization, anti-palatalization

Abstract

Both palatalization and anti-palatalization are attested in Manchu. Palatalization in Manchu can be divided into (i) palatalization of a dental consonant and (ii) palatalization of a velar consonant. (i) is a regular change in all the Manchu varieties except Alcuka Manchu. However, (ii) is only attested in some Modern dialects as a sporadic change. Besides, anti-palatalization is also attested in some Manchu varieties, but it is also a sporadic change.

(おう・かいは 嶺南師範学院)